

## 教育研究業績

氏名 江口 めぐみ  
学位 博士 (心理学)

研究分野	研究内容のキーワード	
心理学 臨床心理学	発達心理学 臨床心理学 主張性 (アサーション) 自己表明 他者配慮	
主要担当授業科目	【学部】 発達心理学, 児童心理学, 基礎演習 I・II, 心理演習 (心理支援実習) 発達心理学セミナー, 卒業研究 【修士】 心理療法特論, 心理実践実習, 心理学研究法演習, 臨床心理学演習 I・II 【博士課程】 発達臨床心理学研究, 発達心理学演習 I・II・III	
教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例 授業資料の公開	令和3年～	講義で用いたスライド、配布物、視聴した動画、講義を補足する情報などを Teams, HP にて逐次公開している
2 作成した教科書, 教材 MINERVA はじめて学ぶ教職5 教育心理学「学習のメカニズム」	平成29年 3月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「学習のメカニズム (第7章)」を担当</li> <li>・教員養成用のテキストとして, 教育心理学を分かりやすく解説している。古典的条件づけやオペラント条件づけ等の学習の代表的な理論の概念や提唱者, 具体的実験を紹介するとともに, 心理療法や教育への応用事例についても解説している。</li> </ul>
看護を学ぶ人のための心理学 ーヒューマン・ケアを科学するー	平成31年 2月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「広がる子どもの世界 (第6章)」を担当</li> <li>・看護師養成用のテキストとして, 心理学の基礎知識と臨床に役立つ知識をまとめ, 看護学生が普段の生活実習先で直面しやすい諸問題を取り上げ, 心理学的視点から解説を行っている教科書である。幼児期・児童期の子どもの心身発達と周囲の対応について解説している。</li> </ul>

3 教育上の実績に関する大学等の評価		特記事項なし
4 実務の経験を有する者についての特記事項 ・会話科講師  ・立正大学での心理学部公開講座講師	平成 18 年 7～10 月  平成 28 年 9 月	宇都宮市教育委員会の依頼を受け、総合的な学習の時間の 1 教科である「会話科」の講師を担当した。2 つの小学校で 3～6 年生の児童を対象に、主張性についての心理教育を実施した。  品川区後援の元で公開講座を実施した。「心理検査を体験してみよう」と題し、高校生を対象に個別式のパーソナリティ検査（エゴグラム）を実施し、その理論と結果の解説を行った。
5 その他		特記事項なし
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1 資格、免許 ・臨床心理士 ・公認心理師	平成 21 年 平成 31 年	登録番号：第 20823 号 登録番号：第 12199 号
2 特許等		特記事項なし
3 実務の経験を有する者についての特記事項 ・つくば市スクールサポーター  ・土浦市スクールライフサポーター  ・つくば木の花クリニック心理士	平成 19 年 4 月 - 平成 20 年 3 月  平成 19 年 4 月 - 平成 20 年 3 月  平成 20 年 1 月 - 現在	茨城県つくば市内の中学校に週 1 回勤務し、相談室において生徒に対する心理面接や教育相談活動を行うとともに、適応指導教室において教育指導の補助活動を行った。  茨城県土浦市内の小学校に週 1 回勤務し、児童に対する相談活動を行う共に、児童への学習サポート、教員へのコンサルテーション活動・養護教諭との連携活動を行った。  精神・心療内科にて週 1 回心理士として、心理面接および心理検査を担当している。

<ul style="list-style-type: none"> <li>・筑波大学子ども相談室相談員</li>   <li>・筑波大学心理・生涯相談室 学外（非常勤）相談員</li>   <li>・東京成徳大学大学院附属心 理教育相談センター所員</li> </ul>	<p>平成 21 年 4 月 - 平成 24 年 3 月</p> <p>平成 28 年 4 月 - 平成 31 年 3 月</p> <p>平成 30 年 4 月 - 現在</p>	<p>筑波大学子ども相談室の相談員として、心理面接・教育相談、相談研修員（大学院生）への指導を行った。</p> <p>筑波大学心理・障害相談室に所属する相談研修員（大学院生）に対して、スーパービジョンおよび研究指導を行った。</p> <p>大学院附属の相談室において心理面接および相談研修員（大学院生）に対して、スーパービジョンを行っている。</p>
<p><b>4 その他</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・論文の入試問題利用 (平成 26-28 年度関西大学大学院入学試験問題集 pp. 3.)</li>   <li>・日本教育心理学会『教育心理学研究』編集委員</li> </ul>	<p>平成 27 年 10 月</p> <p>令和 3 年 1 月 - 現在</p>	<p>論文の一部が、平成 26 年度関西大学大学院博士前期課程の入学試験問題（専門科目 1）に利用された。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・引用論文：江口めぐみ・濱口佳和（2012）他者配慮の観点を含めた児童の主張性と内的・外的適応との関連 心理学研究 83, 141-147.</li> </ul> <p>編集委員として「教育心理学研究」の査読を務めている。</p>

著書・学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
<p>(著書)</p> <p>1. 発達と臨床の心理学</p>	共著	平成 24 年 3 月	ナカニシヤ出版	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ pp.176.</li> <li>・ 渡辺弥生・榎本淳子 (編), 長谷川真理・中原美恵・古屋喜美代・小澤真・安藤美華代・桜井美加・原田恵理子・玉木健弘・宮本孝子・石井睦子・大場いずみ・倉住友恵・濱野公子・川島亜紀子・永嶋昌樹・小野純平・星雄一郎・<u>江口めぐみ</u></li> <li>・ ライフサイクルにおける発達の特徴と臨床的問題とその支援法を検討した著書である。「臨床的なアプローチ (第 10 章コラム)」を担当し、アサーションについて、概要と心理臨床場面でのトレーニングについてのコラムを執筆した。</li> </ul>
<p>2. イラスト版 子どものアサーション・トレーニング</p>	共著	平成 24 年 4 月	合同出版	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ pp.14 - 15, 28 - 29, 46 - 47.</li> <li>・ 園田雅代・鈴木教夫・石川芳子・打波祐子・<u>江口めぐみ</u>・小島裕子・斉藤光男・高橋あつ子</li> <li>・ 児童へのアサーショントレーニングを実施する教育者向けに、アサーションの考え方や言い方について、様々な日常場面を取り上げ、イラストで具体的に示している。「アサーションってなんだろう (第 1 章)」ではチェックリストを示し、自身の主張のタイプについて解説を行った。「アサーションでする聴き方 (第 3 章)」では「人の話を聞いてあげよう」「聞き返してもいいんだよ」の内容を担当し、日常生活場面でのアサーティブな主張の仕方についてのアドバイスを分担執筆した。</li> </ul>

<p>3. MINERVA はじめて学ぶ教職 5 教育心理学「学習のメカニズム」</p>	<p>共著</p>	<p>平成 29 年 3 月</p>	<p>ミネルヴァ書房</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ pp.94 - 108.</li> <li>・濱口佳和(編)・三鈷泰代・本田真大・関口雄一・千島雄太・<u>江口めぐみ</u>・桑原千明・鈴木高志・設楽紗英子・水野雅之・渡部雪子・石川満佐育・藤原健志・臼倉瞳</li> <li>・ 教員養成用のテキストとして、大学生向けに教育心理学を分かりやすく解説している。「学習のメカニズム (第 7 章) を担当し、古典的条件づけやオペラント条件づけ等の学習の代表的な理論の概念や提唱者、具体的実験を紹介するとともに、心理療法や教育への応用事例についても解説している。</li> </ul>
<p>4. 看護を学ぶ人のための心理学ーヒューマン・ケアを科学するー</p>	<p>共著</p>	<p>平成 31 年 2 月</p>	<p>弘文堂</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ pp.89 - 100.</li> <li>・遠藤公久(編)・安藤智子・石川智・蘭牟田洋美・<u>江口めぐみ</u>・今野裕之・他 9 名</li> <li>・ 看護師養成用のテキストとして、心理学の基礎知識と臨床に役立つ知識をまとめ、看護学生が普段の生活実習先で直面しやすい諸問題を取り上げ、心理学的視点から解説を行っている。「広がる子どもの世界 (第 6 章)」を担当し、幼児期・児童期の子どもの心身発達と周囲の対応について解説している。</li> </ul>
<p>5. 児童の主張における他者配慮</p>	<p>単著</p>	<p>平成 31 年 11 月</p>	<p>風間書房</p>	<p>児童期の主張性と、主張における他者配慮について発達心理学的観点からまとめた博士論文を書籍として再編集したものである。</p>

<p>(学術論文)</p> <p>1. 児童の主張における他者配慮の検討 &lt;修士論文&gt;</p>	<p>単著</p>	<p>平成 19 年 3 月</p>	<p>筑波大学人間総合科学研究科ヒューマン・ケア科学専攻</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・総頁 99p.</li> <li>・主張性(アサーション)は、自分の言いたいことを伝えつつ、相手も配慮した主張行動・能力を指す。日本においては、相手を配慮する「他者配慮」の側面が重要視されているが、児童期の他者配慮の諸相はこれまで検討がなされていない。そこで当該論文では、主張における「他者配慮」について、小学 4 - 6 年生を対象に尺度作成を行った。さらに性格特性および適応との関連を検討し、児童の主張における「他者配慮」の特徴を検討した。</li> </ul>
<p>2. 家族以外の他者とコミュニケーションをとることが難しい 5 歳男児への面接過程—ペアレントトレーニングを含む母親面接と INREAL 法による遊戯面接の効果— &lt;査読なし&gt;</p>	<p>共著</p>	<p>平成 19 年 3 月</p>	<p>筑波大学発達臨床心理学研究, 第 18 号</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ pp.1 - 12.</li> <li>・植村みゆき・石川満佐育・三重野祥子・<u>江口めぐみ</u>・濱口佳和 (第 4 著者)</li> <li>・本論文は、筑波大学大学院の発達臨床心理相談室での全 16 回の母子面接過程である。心理査定の結果、IP の問題の背景には、行動抑制傾向および言葉の遅れ、親の過保護な養育態度が考えられた。査定に基づき IP に対しては、プレイセラピーおよび言語心理学的技法を用いるとともに、課題を導入して自発性を促した。母親に対しては養育態度への介入を目的にペアレントトレーニングを実施した。母子への並行的アプローチにより、対象児の主訴の改善がみられた。</li> <li>・担当箇所：遊戯療法の箇所。</li> </ul>

<p>3. 児童の主張行動と仲間関係の適応との関連 —アサーションは本当に児童の仲間関係の適応に役立つのか— &lt;査読あり&gt;</p>	<p>共著</p>	<p>平成 19 年 2 月</p>	<p>カウンセリング研究, 第 42 卷 1 号</p>	<p>・ pp.60 - 70. ・ 濱口佳和・江口めぐみ (第 2 著者) ・ 本研究は, 1,112 名の小学 4~6 年生と学級担任 30 名を対象に, 攻撃行動と向社会的行動の影響を統制した上で, 主張行動が仲間関係の適応に及ぼす影響について検討された。主張性と攻撃行動, 関係維持行動を説明変数, 学級適応尺度を従属変数とした重回帰分析を行った。結果, 主張行動は仲間関係の適応指標に独自の有意な寄与を示すこと, 主張行動と向社会的行動が多く攻撃行動が少ない穏健群が最も適応的で, 主張行動と向社会的行動が少ない低主張群, 攻撃行動が多い高攻撃群が不適応的であることが分かった。・担当箇所: 共著研究につき本人分抽出不可能。</p>
<p>4. 児童の主張性と具体的主張行動との関連 &lt;査読あり&gt;</p>	<p>共著</p>	<p>平成 21 年 3 月</p>	<p>筑波大学心理学研究, 第 37 号</p>	<p>・ pp.65 - 72. ・ 江口めぐみ・濱口佳和 (筆頭) ・ 本研究では 児童 (小学 4 - 6 年生 325 人) を対象に, 具体的主張行動と主張性尺度, 性差との関連を検討した。児童用主張性尺度 (濱口, 1994) と, 主張場面 (友人からの要求を断る) での応答行動 (自由記述) について回答を求めた。応答行動の自由記述はカテゴリー化され, 組合せから 5 つの主張行動に分類された。その上で, 主張性と性差との関連が検討された。そ</p>

<p>5. 児童の主張における「他者配慮」尺度の作成および主張性の類型化の試み &lt;査読あり&gt;</p>	<p>共著</p>	<p>平成 21 年 10 月</p>	<p>カウンセリング研究,第 42 卷 3 号</p>	<p>の結果、主張性の高い者は複数の応答行動カテゴリーを組み合わせた主張行動をとっていること、男子は主張内容を明確に伝える表現、女子は相手や関係性への配慮を伝える表現を多く用いていることが明らかとなった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・担当箇所：全頁</li> </ul> <p>・ pp.256 - 266.</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>江口めぐみ</u>・濱口佳和（筆頭）</li> <li>・主張場面での「他者配慮」の重要性が指摘されているが、児童対象の研究は皆無に等しい。そのため小学生を対象に「他者配慮」の様相を捉える尺度を作成した。また主張のタイプを分類し、性格特性との関連を検討した。研究 1 では 901 名の小学 4 - 6 年生を対象に、「他者配慮」尺度の作成が行われた。その結果、十分な信頼性・妥当性を備えた 1 因子 16 項目の尺度が作成された。</li> <li>また「他者配慮」得点は、男子より女子で高いことが確認された。研究 2 では 287 名の小学 4 - 6 年生を対象に、主張性のタイプを「自己表明」、「他者配慮」の組み合わせから 4 群に分け、心理的特徴との関連を検討した。結果より、男子は他者配慮の優位な群、女子は自己表明と他者配慮の両方が低い群で、不適応的特徴が高いことが明らかとなった。</li> <li>・担当箇所：全頁</li> </ul>
--	-----------	-------------------------	-----------------------------	---



<p>6. 児童の主張性研究の動向—実践との関連から— &lt;査読なし&gt;</p>	<p>単著</p>	<p>平成 22 年 2 月</p>	<p>筑波大学発達臨床心理学研究, 第 21 号</p>	<p>・ pp.61 - 65. ・ 児童の主張性について近年の我が国における研究の動向と、教育的現場での実践活動とを概観した。また「他者配慮」の視点を踏まえた日本独自の尺度が多く作成されていること、教育的トレーニングの効果に関する基礎研究についてまとめている。 また実践活動については、治療的トレーニングと教育的トレーニングの違いを明らかにした上で、その意義と、性差および認知的発達の視点を踏まえることの重要性を指摘している。</p>
<p>7. 他者配慮の観点を含めた児童の主張性と内的・外的適応との関連 &lt;査読あり&gt;</p>	<p>共著</p>	<p>平成 24 年 6 月</p>	<p>心理学研究, 第 83 巻 2 号</p>	<p>・ pp.141 - 171. ・ <u>江口めぐみ</u>・濱口佳和 (筆頭) ・ 児童の主張性と内的・外的適応との関連を検討した。小学 4 - 6 年の児童 207 人と担任教師 8 人が、質問紙に回答した。内的適応は自己評定、外的適応は自己評定に加えて担任教師と同性級友からの他者評定によって測定を行った。結果より、主張性の両得点が高い児童は、両得点が高い児童に比べて、自己評定得点が高かった。また他者配慮得点の高い児童は、外的適応得点を高く評価していた。さらに他者評定の結果から、男子の自己表明が低い児童は、教師から見た外的適応が低く、女子の他者配慮が高い児童は、教師から見た外的適応と仲間からの肯定的指名が高いという結果になった。 ・ 担当箇所：全頁</p>

<p>8. 児童の主張性と養育者の養育態度との関連の検討 &lt;査読なし&gt;</p>	<p>単著</p>	<p>平成 26 年 3 月</p>	<p>立正大学心理学研究 年報, 第 5 号</p>	<p>・ pp.55 - 61. ・ 児童の主張性に影響を及ぼす要因として、養育者の養育態度に注目し検討を行った。小学 4 - 6 年の児童 358 名に対して自身の主張性と親の養育態度について質問紙で評定を求めた。分析の結果、養育者が子供に受容的かつ統制的にかかわる関与群と、受容的な受容優位群という、受容の高い 2 群において、児童は自己表明と他者配慮を多く行うことが示された。また女子の場合、受容を伴わない統制的な養育態度のもとでは他者配慮が育まれにくいことが示され、統制的な養育行動が子供の主張性へおよぼす影響は、男女で異なる可能性があることが明らかとなった。</p>
<p>9. 多次元性関係性攻撃尺度（教師評定・小学生版）の作成 &lt;査読なし&gt;</p>	<p>共著</p>	<p>平成 26 年 3 月</p>	<p>筑波大学発達臨床心理学研究, 第 24 号</p>	<p>・ pp.27 - 34. ・ 尾花真梨子・濱口佳和・<u>江口めぐみ</u>（第 3 著者） ・ 小学校教員 87 名に対し、担任した各児童について関係性攻撃と適応状況の関連について評定を求めた。その結果、人気児は拒否児に比べて関係性攻撃が高く、それ以外の不適応変数は拒否児が有意に得点の高いことが示された。また性別を考慮した場合も同様の結果となった。さらに人気児で孤立傾向の高い場合は、無視・関係操作・排除といった関係性攻撃を積極的に行い、非行的傾向を強めることが示された。拒否児においては、</p>

<p>10.主張性と児童の内的・外的適応との因果関係—短期縦断的検討— — &lt;査読あり&gt;</p>	<p>共著</p>	<p>平成 27 年 8 月</p>	<p>心理学研究, 第 85 卷 3 号</p>	<p>仲間の攻撃に同調する追従的關係性攻撃が非行的行動と関連することが示された。 ・担当箇所：共著研究につき本人分抽出不可能。 ・ pp.191 - 199. ・ <u>江口めぐみ</u>・濱口佳和（筆頭） ・本研究では，児童の主張性が内的・外的適応へ及ぼす影響について検討した。小学 4 - 6 年の児童 284 人が，短期縦断的調査により，6 か月の間に 2 度，質問紙に回答した。児童は，自己表明と他者配慮の 2 側面を含む主張性尺度に回答した。また内的適応指標として自尊感情，外的適応指標として学級生活での満足度を用いた。結果より，自己表明は外的適応に正の影響を及ぼし，他者配慮は内的適応に正の影響を及ぼすことが明らかとなった。これにより主張性の側面の種類により，適応への影響が異なることが示された。さらにクラスター分析の結果，主張性のタイプは 4 群に分かれ，自己表明の高い群は自尊感情が高く，他者配慮の高い群は承認が高く，両方の低い群が最も不適応的であることが示された。 ・担当箇所：全頁</p>
<p>11.主張性の種類および主張性が対人場面における目標設定におよぼす影響 &lt;査読なし&gt;</p>	<p>単著</p>	<p>平成 29 年 3 月</p>	<p>立正大学臨床心理学研究, 第 15 号</p>	<p>・ pp.1 - 8. ・本研究では，主張行動の種類と主張性が，社会的情報処理の目標設定へ及ぼす影響を検討することを目的とした。小学 5 - 6 年の児童</p>

<p>12. 大学生における選択性緘黙への認識に関する調査 &lt;査読なし&gt;</p>	<p>単著</p>	<p>平成 30 年 3 月</p>	<p>立正大学臨床心理学 研究,第 16 号</p>	<p>516 人を対象に、質問紙調査を実施した。児童は友人の主張行動(主張的, 配慮的, 攻撃的, 非主張的の 4 種類)に対する主張目標の設定と、自己表明, 他者配慮の 2 側面を含む主張性尺度に回答した。結果より、男女ともにいずれの場面においても主張行動の主効果が見られ、目標設定は相手の主張行動の種類に影響されることが示された。また受け手の主張性によって、目標設定に差が生じることが示され、自己表明と他者配慮の高い両高群は、他の群に比べて主張目標, 友好目標を設定しやすいことが示された。</p> <p>・ pp.31 - 39.</p> <p>・ 選択性緘黙の児童生徒にとって、周囲の人間関係の在り方は非常に重要であるが、その周囲の選択性緘黙に対する認識や関わりについては検討が不足している。本研究の目的は、大学生を対象に選択性緘黙への認識について検討することであった。大学生 118 名に質問紙調査を行った結果、選択性緘黙の名称もしくは症状について何らかの知識があった者は約 7 割で、その多くが心理学の授業内で知識を得ていた。選択性緘黙に接した経験のある者は約 3 割に上った。選択性緘黙の当事者は男性よりも女性で多く、接した時期は小・中学校が約 8 割であった。その際に本人や周囲から症状や望ま</p>
--	-----------	------------------------	--------------------------------	--

<p>13. なぜ主張の際に他者配慮をするのか？ — 大学生における理由の検討— &lt;査読なし&gt;</p>	<p>単著</p>	<p>平成 30 年 3 月</p>	<p>立正大学心理学研究所紀要, 第 16 号.</p>	<p>しい関わりについての説明はほとんどなく, 学生は自発的に自然な関わりをとっていた。一方で正しい知識や説明を求める意見は 7 割に上り, 正しい知識が本人の理解やサポートに繋がるといった意見や, 説明がないことで人間関係の悪化や誤った対応に繋がると懸念する意見が多く見られた。また個人の意思を尊重することや, 周囲の自発的な配慮を求める意見も見られた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ pp.1 - 8.</li> <li>・ 本研究の目的は, 大学生の主張における他者配慮の理由について実態を把握するとともに, 測定尺度を作成し, その構造を検討することであった。調査 1 では大学生 228 名から収集された自由記述を KJ 法で分類した。その結果, 5 カテゴリーが抽出され, 結果をもとに 30 項目からなる仮尺度が作成された。調査 2 では大学生 171 名に仮尺度への回答を求めた。因子分析の結果, 21 項目 3 因子 (「関係維持」, 「印象管理」, 「自己肯定」) からなる他者配慮の理由尺度が作成された。尺度は一定の信頼性と妥当性が確認された。また性差が見られ, 男性に比べて女子で得点が高いことが示された。大学生の主張における他者配慮の背景には, 他者との良好な関係を維持するとともに, 他者からの肯定的な印象を獲得し, 自分らしい表現や</li> </ul>
---	-----------	------------------------	------------------------------	--

				自己肯定にもつながるという価値観が存在することが明らかとなった。
12.選択性緘黙に対する大学生の理解と支援観の検討 <査読なし>	単著	平成 31 年 3 月	東京成徳大学臨床心理学研究,第 19 号	<p>・ pp.180 - 188.</p> <p>・ 選択性緘黙の症状の改善には、周囲の正しい理解と適切な関わりが重要とされているが、周囲への教育の実践や効果はほとんど報告がなされていない。本研究では大学生を対象に、選択性緘黙に関する VTR の視聴と講義を行い、その教育効果の検討を行った。137 名に対して VTR の視聴前後で質問紙調査を行った結果、講義後に新しく理解したことがあると答えた者は 9 割であり、「わざと黙っている」「そのうち自然に治る」「家庭に問題がある」などの誤解が改善されていた。また支援観に変化があった者は 8 割強であり、無理に話させるのではなく、リラックスできるように自然に発話を待つことや、共感的で温かな長期的指導・支援を行うといった支援観が高まっていた。また同じ緘黙症状でも、求める支援には個人差があることや、緘黙症状の分かり難さや理解の必要性を感じたという意見も多く見られた。講義を受講することで、正しい理解や支援観の向上につながり、また VTR を通して書籍等では分からない選択性緘黙の状態像やコミュニケーションの様子を目の当たりすることで、学生の体験的理解につながっていた。</p>

(その他)				
(学会発表)				
1. アサーティブネス (主張性)は児童の仲間関係の適応に役立つのか？(Ⅰ)—児童用主張性尺度の再検討—	共同 (筆頭)	平成 18 年 9 月	日本教育心理学会第 48 回総会 (岡山大学)	・ 学術論文 3 の一部を, ポスター形式で発表したものである。 ・ <u>江口めぐみ</u> ・濱口佳和 ・ 発表論文集 pp.566.
2. アサーティブネス (主張性)は児童の仲間関係の適応に役立つのか？(Ⅱ)—アサーティブネスと仲間関係の適応指標との関連の検討—	共同	平成 18 年 9 月	日本教育心理学会第 48 回総会 (岡山大学)	・ 学術論文 3 の一部を, ポスター形式で発表したものである。 ・ 濱口佳和・ <u>江口めぐみ</u> ・ 発表論文集 pp.567.
3. 児童の主張における他者配慮と適応との関連の検討	共同 (筆頭)	平成 19 年 9 月	日本心理学会第 71 回大会 (東洋大学)	・ 修士論文の一部を, ポスター形式で発表したものである。 ・ <u>江口めぐみ</u> ・濱口佳和 ・ 発表論文集 pp.1000.
4. 児童の主張における他者配慮尺度の作成	共同 (筆頭)	平成 19 年 9 月	日本教育心理学会第 49 回総会 (文教大学)	・ 修士論文の一部を, ポスター形式で発表したものである。 ・ <u>江口めぐみ</u> ・濱口佳和 ・ 発表論文集 pp.531.
5. 青年の能動的・反動的攻撃性に関する研究 (3): 高校生サンプルにおける因子パタンの検討と下位尺度の構成	共同	平成 19 年 9 月	日本教育心理学会第 49 回総会 (文教大学)	・ 科学研究費基盤研究 (C) 課題番号 17530500 (青年期における能動的攻撃性・反動的攻撃性の発達臨床心理学的研究) の成果をポスター形式で発表した。 ・ 三鈷泰代・濱口佳和・石川満佐育・ <u>江口めぐみ</u> ・ 発表論文集 pp.23.

6. 青年の能動的・反動的攻撃性に関する研究(4): 高校生サンプルにおける検証的因子分析と併存的妥当性の検討	共同	平成 19 年 9 月	日本教育心理学会第 49 回総会 (文教大学)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 概要は学会発表 5. と同様。</li> <li>・ 石川満佐育・濱口佳和・<u>江口めぐみ</u>・三鈷泰代</li> <li>・ 発表論文集 pp.24.</li> </ul>
7. 青年の能動的・反動的攻撃性に関する研究(5): 高校生の能動的・反動的攻撃性と攻撃的行動傾向との関連性の検討	共同	平成 19 年 9 月	日本教育心理学会第 49 回総会 (文教大学)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 概要は学会発表 5. と同様。</li> <li>・ 濱口佳和・<u>江口めぐみ</u>・三鈷泰代・石川満佐育</li> <li>・ 発表論文集 pp.58.</li> </ul>
8. Construction of the Others in Assertion Scale for Children	共同 (筆頭)	平成 19 年 9 月	Asia Congress of Health Psychology3 (早稲田大学)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学術論文 5. の内容についてポスター及び口頭で発表を行った。</li> <li>・ <u>Megumi Eguchi</u> &amp;Yoshikazu Hamaguchi</li> </ul>
9. 中学生の能動的・反動的攻撃性と道具的挑発場面における社会的情報処理ならびに応答行動との関連(1)	共同 (筆頭)	平成 20 年 9 月	日本心理学会第 72 回大会 (北海道大学)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 概要は学会発表 5. と同様。</li> <li>・ <u>江口めぐみ</u>・濱口佳和・石川満佐育</li> <li>・ 発表論文集 pp.1218.</li> </ul>
10. 中学生の能動的・反動的攻撃性と道具的挑発場面における社会的情報処理ならびに応答行動との関連(2)	共同	平成 20 年 9 月	日本心理学会第 72 回大会 (北海道大学)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 概要は学会発表 5. と同様。</li> <li>・ 濱口佳和・石川満佐育・<u>江口めぐみ</u></li> <li>・ 発表論文集 pp.1219.</li> </ul>
11. 中学生の能動的・反動的攻撃性と道具的挑発場面における社会的情報処理ならびに応答行動との関連(3)	共同	平成 20 年 9 月	日本心理学会第 72 回大会 (北海道大学)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 概要は学会発表 5. と同様。</li> <li>・ 石川満佐育・<u>江口めぐみ</u>・濱口佳和</li> <li>・ 発表論文集 pp.1220.</li> </ul>



12. 児童の主張性のタイプと心理的特徴との関連の検討	共同 (筆頭)	平成 20 年 9 月	日本教育心理学会第 50 回総会 (東京学芸大学)	・学術論文 4. の内容をポスター形式で発表したものである。 ・ <u>江口めぐみ</u> ・濱口佳和 ・発表論文集 pp.501.
13. 中学生の能動的・反応的攻撃性と道具的挑発場面における社会的情報処理ならびに応答行動との関連(1)—社会的情報処理変数および応答的行動変数の因子構造の検討—	共同	平成 20 年 9 月	日本教育心理学会第 50 回総会 (東京学芸大学)	・概要は学会発表 5 .と同様である。 ・桑原千明・濱口佳和・ <u>江口めぐみ</u> ・発表論文集 pp.115.
14. クリニックにおける多職種での治療アプローチが有効であった思春期青年期ケースの特徴	共同	平成 21 年 10 月	日本児童青年精神医学会第 50 回総会 (京都国際会館)	・心療内科クリニックでの思春期青年期患者への他職種による共同治療アプローチ (精神科医・心理士・精神保健福祉士) について, ケース担当の心理士として参加した。発表は口頭で行われた。 ・小林純・山口直美・河野憲人・永井智・伊藤直哉・丹羽まどか・ <u>江口めぐみ</u>
15. 児童の主張における「他者配慮」と具体的主張行動との関連	共同 (筆頭)	平成 22 年 8 月	日本教育心理学会第 52 回総会 (早稲田大学)	・他者配慮と主張行動 (自由記述) との関連について, ポスター及び口頭で発表を行った。 ・ <u>江口めぐみ</u> ・濱口佳和 ・発表論文集 pp.458.
16. 児童のアサーションにおける「他者配慮」の意義—適応との関連の検証と教育実践への展開をめぐって—	共同	平成 22 年 8 月	日本教育心理学会第 52 回総会 (早稲田大学)	・自主シンポジウム ・「児童の主張における『他者配慮』の意義」について話題提供者として, これまでの主張性研究の成果の発表を行った。 ・濱口佳和・ <u>江口めぐみ</u> ・藤枝静

<p>17. 関係性攻撃と心理社会的適応との関連(3) —教師評定による児童用関係性攻撃尺度の作成の試み</p>	<p>共同</p>	<p>平成 23 年 9 月</p>	<p>日本カウンセリング学会第 44 回大会</p>	<p>暁・(話題提供者) ・ 発表論文集 pp.94 - 95.  ・ 科学研究費基盤研究 (B) 課題番号 22330187(関係性攻撃と心理社会的適応との関連についての生涯発達心理学的研究) の一部である。児童用関係性攻撃尺度の教師評定版をポスター形式で発表した。 ・ 桑原千明・関口雄一・<u>江口めぐみ</u>、他 3 名 ・ 発表論文集 pp.134.</p>
<p>18. Assertiveness and Interpersonal Stress in Japanese Children.</p>	<p>共同 (筆頭)</p>	<p>平成 24 年 7 月</p>	<p>16th European Conference on Personality</p>	<p>・ ポスターおよび口頭発表 ・ 児童の主張性と心理的ストレス過程との関連について検討を行った結果、主張性の自己表明は直接的に心理的ストレス反応を低減していた。また他者配慮はストレス反応を高めるようなコーピングを抑制することで、心理的ストレス反応の低減に間接的に寄与することが示された。 ・ <u>Megumi Eguchi &amp; Yoshikazu Hamaguchi</u> ・ 発表論文集 pp.218.</p>
<p>19. 職場の勤労者の関係性攻撃を多次元的に測定し、その心理社会的適応との関連を検討 (ワークショップ)</p>	<p>共同</p>	<p>平成 24 年 9 月</p>	<p>日本心理学会第 76 回総会 (専修大学)</p>	<p>・ 職場の勤労者の関係性攻撃について、多次元的な測定尺度の作成と、その心理社会的な適応に関してワークショップを実施した。共著研究者として司会を担当した。 ・ 濱口佳和, 岡田昌毅・設楽紗英子・関口雄一・<u>江口めぐみ</u> ・ 発表論文集 pp.14.</p>

20. 児童の主張性と具体的主張行動との関連	共同 (筆頭)	平成 25 年 9 月	日本心理学会第 77 回大会 (札幌コンベンションセンター)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・科学研究費若手研究 (B) 課題番号 23730603 (他者配慮を含めた児童の主張性と社会的情報処理モデルとの関連) の一部である。主張行動 (自由記述) との関連について、ポスター及び口頭で発表を行った。</li> <li>・江口めぐみ・濱口佳和 (筆頭)</li> <li>・発表論文集 pp.521.</li> </ul>
21. 児童の主張性と主張行動内容との関連 (2)	共同 (筆頭)	平成 25 年 9 月	日本カウンセリング学会第 46 回大会 (東京電機大学)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・概要は学会発表 20. と同様である。他者配慮と主張行動 (自由記述) との関連について、主張性の 4 類型 (自己表明と他者配慮の高低) と性差との関連についてポスター及び口頭で発表を行った。</li> <li>・江口めぐみ・濱口佳和 (筆頭)</li> <li>・発表論文集 pp.96.</li> </ul>
22. 自他尊重のコミュニケーション—児童期の主張性研究から— (受賞者講演)	単独	平成 27 年 8 月	日本カウンセリング学会第 48 回大会 (環太平洋大学)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第 18 回学校カウンセリング松原記念賞の受賞を受け、これまでの児童期の主張における他者配慮研究の成果を概観し、今後の展望について講演を行った。</li> </ul>
23. 主張行動および受け手主張性と、応答行動目標設定と関連(1)	単独	平成 26 年 10 月	日本パーソナリティ心理学会第 23 回大会 (山梨大学)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・概要は学会発表 20. と同様である。主張行動を行う際、受け手側の主張性が、その後の応答行動の目標設定にどのように影響を与えるかについて検討を行った。発表はポスター及び口頭で行った。</li> <li>・発表論文集 pp.129.</li> </ul>
24. 主張行動目標の「伝わりやすさ」に関する要因の検討—主張行動	単独	平成 28 年 9 月	日本パーソナリティ心理学会第 25 回大会 (関西大学)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・概要は学会発表 20. と同様である。主張行動目標 (友好・主張) の伝わりやすさについて、主張行</li> </ul>

<p>の種類および受け手の主張性—</p> <p>25. なぜ主張の際に他者配慮をするのか—目的の分類—</p> <p>26. 主張性が児童の心理的ストレス過程へ及ぼす影響</p>	<p>単独</p> <p>共同筆頭</p>	<p>平成 29 年 9 月</p> <p>平成 30 年 9 月</p>	<p>日本カウンセリング学会第 50 回大会(筑波大学・跡見女子大学)</p> <p>日本心理学会第 82 回大会 (仙台国際センター)</p>	<p>動の種類と、受け手の主張性の観点から検討を行った。発表はポスター及び口頭で行った。</p> <p>・ 発表論文集 pp.144.</p> <p>・ 科学研究費若手研究 (B) 課題番号：25870809 (主張における他者配慮の包括的理解および促進方法の開発) の一部である。主張の際に他者配慮を行う背景について、ポスター発表を行った。</p> <p>・ 児童の他者配慮と自己表明が心理的ストレス過程に及ぼす影響過程について、ポスター及び口頭で発表を行った。</p> <p>・ <u>江口めぐみ</u>・濱口佳和 (筆頭)</p>
<p>(科研費)</p> <p>1. 平成 23 年度科学研究費助成事業 (学術研究助成基金) 若手研究 (B)</p> <p>2. 平成 25 年度科学研究費助成事業 (学術研究助成基金) 若手研究 (B)</p> <p>3. 平成 28 年度科学研究費助成事業 (科学研究費補助金) 基盤研究 (B)</p>	<p>単独</p> <p>単独</p> <p>共同</p>	<p>平成 23 年～24 年</p> <p>平成 25 年～28 年</p> <p>平成 28 年～30 年</p>	<p>・ 研究代表者</p> <p>・ 総額 195 万円</p> <p>・ 研究代表者</p> <p>・ 総額 390 万円</p> <p>・ 研究分担者</p> <p>・ 総額 1,183 万円</p>	<p>「他者配慮を含めた児童の主張性と社会的情報処理モデルとの関連 (課題番号：23730603)」</p> <p>・ 「主張における他者配慮の包括的理解および促進方法の開発 (課題番号：25870809)」</p> <p>・ 「選択性緘黙児童生徒の多様な状態像の解明と個に応じた支援方法の検討 (課題番号：16H03808)」</p> <p>・ 研究代表者：園山繁樹</p> <p>・ 研究分担者：下山真衣・濱口佳和・松下浩之・<u>江口めぐみ</u>・酒井貴庸・関口雄一</p>